谷戸の風 ㊽

平成よ　さらば

山内静夫

桜の花に、雪が降りつもる。俳句の季語にもあるそうだから、古来日本の風土にはよくあったことかもしれないが、それは美しい。

真冬のような寒さが、四月というのに何度もやってきた。気温の急変は、老の身には応える。今年の四月は特別なのである。言わずもがな、天皇が退位されるという、日本の歴史にとって初のことが行われるのだから。

木版画　藤本宿

平成の時代が終る。四月三十日をもって平成の御代は終り、五月一日から令和の年となる。天皇は御健在のまま退位され、上皇となられる。年号が替わり、皇太子が天皇となられる。新しい時代の幕が明くのである。

我々国民にとってどう気持ちをもっていけばよいのか、新天皇の誕生をお祝い申し上げるのに、やはり退位された上皇への気持ちをどう心の中で崇めればいいのか、天皇皇后のこの三十年の長い御心労が容易に頭を去らないのは国民すべての気持ちではないだろうか。

被災者と膝をつき合わさんばかりに近寄りお声をかけられる皇后のお姿は日本のお国柄を何よりも深く国民の心に滲ませて下さったものと頭を離れないのだ。大津波や大地震の災害にしても、国民の受けた痛みを正に両陛下が吸いとって下さるかの如き慈しみの御心を忘れ去る人はいないに違いない。勿論次代の天皇にも万世一系、引き継がれることであろう。

令和の時代を我々はどう迎えればよいのだろうか。平和、の一言ですむような、そんな甘ッチョロイ時代がくるとはとても考えられない。宇宙規模で世界は変るかもしれない。そんな時代にはならないと誰が予言できようか。

親子で竹の子狩り

緑の保全作業に協力

鎌倉市梶原の桔梗山山頂（標高113㍍）付近の山林保全作業の一環で4月13日、タケノコ狩りが行われた＝写真。

桔梗山一帯は県有地となっているが、緑と歴史遺産の保全活動などを行っている市民団体「山桜を守る会（市川和夫代表・会員約50人）がモウソウチクの増殖でヤマザクラなどの草木が浸食されていることを危惧し、昨年2月から県の承認を得て竹林の手入れを始めた。週2回でこれまで80回ほど活動している。

タケノコ狩りはその一環でタケノコの時期に地域の人たちに呼びかけ、一時的に同会会員として参加してもらっている。

子ども連れなど集まった100人以上の参加者たちは、「ここは県有地で日ごろはタケノコ採りに入れないこと、採ったタケノコは販売しないこと、掘った後の穴を埋めること」などの注意を受けると同会会員や緑のレンジャーたちの案内で竹林を目指した。

竹林の中は同会員が切り倒したタケが積まれていて、高さ50㍍ほどに切られた太いタケが多数林立している。

西鎌倉から母親と訪れた嶋方葵泉さん(10)、結希くん(5)、悠真くん(4)は一か所に数個の芽がでているのを見つけ1時間ほどかけて3本掘った。一人で52本掘り、背中のリュックをいっぱいにした女性もいて、この日の収穫量は500本近くあったという。

市川代表は「日ごろの活動のかいあって、今年はヤマザクラの花見を楽しめた」と話していた。

中学生が外科手術を体験

湘南鎌倉人工関節センター

人工関節に特化した最長）で3月25日中学生を対象とした「ドクター体験セミナー」が行われ、9人の生徒が手術器具を使った実践的な講習に臨んだ＝写真。

一次救命処置の実習や手術室の見学後、滅菌した本物の手術用ガウンと手袋を着用し、股関節の人工関節置換術と豚肉を使用した縫合術を体験。大きさや重さを忠実に再現した模擬大腿骨の骨頭部を電動ノコギリで切り落とし、インプラントを打ち込む作業と、医師がメスで切った豚肉の切開部分を縫合・結さつする実習を行った。骨の構造や針と糸の使い分け、手技のコツなどを学び、縫合術や力の必要な整形外科手術を実践した。

医療関係への進学をめざす茅ヶ崎在住の伊藤夏煕くん(15)は「骨に穴を開ける作業が一番難しかった。実践的な講習が受けられて楽しかった」と話し、勉強机の前に飾りたいと模擬骨をバッグに収めた。検査室、放射線科、リハビリテーション科などの見学もあった。今回で4回目の同セミナーは子どもたちへ実践の場を提供したいと平川院長が発案。「目で見て触って五感で感じることが大切。興味のあることを見つけて突破する力にしてほしい。そのひとつが医療現場であればうれしい」と中学生の未来に熱いメッセージを伝えた。（K）

文学つれづれ ㉒

翁と乙女（十四）

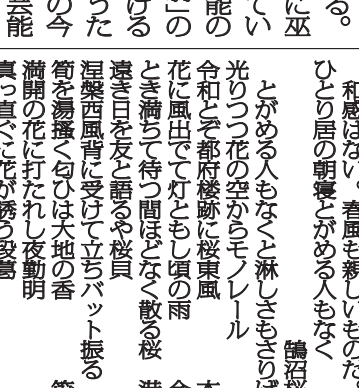
赤羽根龍夫

もともとは「もどき芸」であった猿楽は徐々に翁の神聖性を前面に押し出し、神聖な翁を創造し、元々の「もどき役」としての滑稽な翁は三番叟として狂言方に受け持たせたのである。だから翁のもどきとしての三番叟が元であったと思われる。

翁面についても、私は黒色の三番叟の面のほうが元だと思っている。黒というのは稲が豊かに稔った状態、黒ずんだ様を表している。初め猿楽者がつけた翁面は黒色の滑稽な面であったであろう。

一般には翁面は雅楽の採桑翁の面から生まれたと考えられている。あごが切ってあり、紐で結ばれ上品は笑いをたたえている点をその根拠としている。しかし、現在各地に残されている民間の古面の中の黒色尉は切りあごでないものが多いし、それらの古面は能楽大成前と思われる相貌を伝えているものがある。

後藤淑『能楽の起源』によると、愛媛県重信町の浮島神社の黒色尉は切り顎、釣り顎で翁系仮面であるが、その表情は目が左右不均衡である、口はひょっとこ型、鼻がカギ鼻であり、まことに滑稽な表情をしている。この面は江戸時代の記録によると、雨乞いの面であるとある。



狂言面「武悪」（著者作）

このような左右不均衡でウソフキ型の口をした仮面は日本各地の神社に多く残されている。

私の考えでは、もともと翁面は黒色のものであった。翁が神聖視され、仏教の狂厳な姿に刺激を受け、今までの黒い面では品がないとされ、舞楽の採桑老を手本に白色の翁面が作られた。それが反対に三番叟や民間の翁面にも影響を与えた。こうして翁面は現在見られるようなものになったが、民間の古面には目や口がまがっている滑稽な表情が残された。

能では白色尉に影響を受け、黒色尉もいささか農村の老人の表情を残しているものの、時代が下るにしたがって端正な表情に作られるようになったのであろう。しかし世界各国に伝わる仮面はほとんどグロテスクな表情をしている。民衆の生命力・エネルギーを表現するものとしてのグロテスクの持つ意味を日本の芸能は考え直さなければならない時期が来ていると思う。

折口信夫は「日本の芸能の大きな要素をなすものとして、もどき役を重く見たいと思います」と言う。田祭りに見られるように、私は神をもどくということが芸能のはじまりであったと思う。巫女が神がかりをするのも「もどき」であった。それは厳粛であっても天の岩戸の前で神がかりした天のウズメノミコトの舞踏に神々が大笑いしたように滑稽でエロチックな踊りであった。

厳粛と滑稽とエロチックーこのどれか一つでも忘れた芸能は、どんなに幽玄であろうと生き生きとしたエネルギー、原始の力が失われているのである。能の様式美は滑稽を忘れた所に成立している。そこには何か人を窒息させてしまうものがある。狂言という形で能は滑稽を含んでいるというが、卑近な題材をのみ求めて滑稽を卑しめて神々の笑いを失っているように思う。私は日本の芸能が、神々の笑いを取り戻す日が来ることを願ってやまない。

しばらく翁の問題にのみかかずらいすぎたが、それでは能の翁と乙女はどういう関係があるのだろうか。

翁のうち古い形を伝えているのは金春流である。金春流の翁舞は巫女舞の型をとりいれているという。翁舞の源流を尋ねて行くと神楽の巫女舞にたどりつくのである。そのように翁舞の中に巫女舞がとり入れられているのは、他の民族芸能の中にもみられる。「翁」の中でシテが翁面をつける前にうたう「とうとうたらりたらりら」以下の今様四句神歌は、民族芸能の中では「翁」とは別にうたわれており元々神降ろしの歌であったと思う。

（神奈川歯科大名誉教授）

鎌倉朝日歌壇

香山　静子　選

汗をせし昭和はいよよかすみたり孫子の御世の令和に幸あれ　辻堂　柳　蒼柳

新しい時代への期待感がある。

並びたるねぎ坊主らは頭をゆすり春の日差しと会話している　逗子市　湊　美根子

対象への迫り方に独自性がある。

うぐいすの初音聞きしを君に告ぐ野辺に川辺に春は動けり　津　石川　韶子

結句の「春は動けり」で作者のよろこびも伝わる。

奉祝の幟連ねて弁天の重文指定島は慶ぶ　片瀬　中村　喬

南国の入江深くに蒼き海重き歴史を秘めて鎮もる　藤沢市　三浦　和子

白木蓮のつぼみは春を生む卵つるりと皮脱ぎ真白に光る　大船　小笹岐美子

車窓より紫色の線流る今年も咲いた大根の花　扇ガ谷　鈴木　久子

令和とう元号どこか未来めくきれいな響きに深くうなずく　材木座　有野裕美子

義兄逝きて厨に眠る延命水のすこし薄めの水割り供ふ　岡本　鳴海　紀政

夕凪の京浜運河のかいつぶり荷舟通れば上下にゆたふ　今泉台　下田　和夫

春潮の匂ふ大路の桜花今を賑はす遠来の客　手広　高口　道宏

鎌倉朝日俳壇

星野　高士　選

〈天〉遠景の卯波砕ける鳥帽子岩　岡本　森田　孝

遠景でありながらしっかりと卯波の砕けるところを捉えた写生が利いている一句。

〈地〉聞き重ね初音となりぬ谷戸の径　植木　風見　玲子

上五の表現で作者の初音へ対する思いが出ている。

〈人〉花人のすい込まれ行く二の鳥居　大船　添田　洋子

花人が二の鳥居から段葛、八幡宮へと誘はれてゆくのが実感として詠めている。

ひと粒にはじまる暁の木の芽雨　逗子市　塩谷　あい子

木の芽雨を暁に感じている作者の喜びもあったか。ひと粒に新しい発見があった。

春風や幼なじみの土地言葉　腰越　松原　薫

誰でも故郷はよきもの。特に幼なじみの土地言葉に違和感はない。春風も親しいものだ。

ひとり居の朝寝とがめる人もなく　鵠沼　桜井　一色千穂子

とがめる人もなく淋しさもさりげなく伝えている。

光りつつ花の空からモノレール　片瀬　國安　佳子

令和とぞ都府楼跡に桜東風　本鵠沼　森田　順子

花に風出でて灯ともし頃の雨　金沢区　岩澤　正春

とき満ちて待つ間ほどなく散る桜　港南区　横田千津子

遠き日を友と語るや桜貝　今泉　小林刀羊子

逗葉西風背に受けて立ちバット振る　台　橋本久美子

筍を湯掻く匂ひは大地の香　笹目町　腰越　松原

満開の花に打たれし夜勤明　梶原　吉田　健二

真っ直ぐに花が誘う段葛　笛田　満喜

一陣の風の強さよ飛花落花　上田　材木座　有野　冬花

犬ふぐり地を這う青き星の色　藤沢市　槇野あさ子

願はくば平穏な日々水温む　逗子市　佐藤　信子

宝珠めぐぼたんの蕾七つほど　葉山町　近藤　純

桜花散る民草いずこ十連休